

分科会B記録

I. 概要

日時：平成 24 年 5 月 25 日 10：00～12：00

場所：日本科学未来館

テーマ：「加速する研究ー日本と韓国、支援のための3つの視点ー」

分科会Bでは下記の3名より話題提供を行い、終了後に質疑応答を行った。

【座長】加藤斉史氏 独立行政法人 科学技術振興機構 知識基盤情報部 副調査役

【話題提供】

1. 「韓国医学図書館の研究支援サービスの現況」

李英震氏 韓国医学図書館協議会企画委員(江東慶熙大学校病院 医学図書室)

2. 「国立系医科大学における学術機関リポジトリの取り組みについて」

加藤晃一氏 京都大学附属図書館、元浜松医科大学学術情報課長

3. 「国内学術雑誌の電子化および発信の現状と課題」

～J-STAGE とジャパンリンクセンターを中心に～

久保田壮一氏 独立行政法人 科学技術振興機構

【座長より要旨の説明】

日本において、学術研究機関は所属する教員の文献の電子化を推進し学内外に発信しはじめ、公的機関は学術論文の積極的な電子化促進を行っているなど、近年めざましい努力が各所で行われているが、こういった、現場の担当者の相当な苦労によって研究情報が潤沢に流通し、イノベーションを興すような研究を加速している状況にある。

その成果として、学術機関リポジトリは現在 167 機関（平成 24 年 4 月 17 日現在）で構築されており、国別の機関数では、世界のトップクラスにあるが、学術情報流通を改革すると同時に大学等における教育研究成果の発信を実現するためにも大きな役割を果たしている。また、J-STAGE は、科学技術情報の電子化促進により、我が国の科学技術情報の発信と流通の迅速化と国際化を図っており、現在 857 の学術雑誌を電子化し、41 万件以上の論文フルテキストを提供している。

日本医学図書館協会や日本薬学図書館協議会は各勉強会や分科会において電子リソースの管理やこれからの電子メディアについて話題として取り上げてきた。今回はさらに発展し、電子化促進をまさにやっている現場の方針と苦悩をディスカッションすることによって、参加者の知見を拡げていく。

一方、隣国である韓国に目を向けてみると、各機関が共同し、データベース（約 70 種）の共同利用や統合検索が可能な「国家電子図書館」が構築され、公共図書館で比較的安価に電子化論文を手に入れられる体制となっている。また、国の行政機関が一丸となって取り組み、私的教育の負担軽減や教育に関する地域間格差の解消が必要であるという認識が浸透しているため、豊富な教育学術情報が整備されており学ぶべき所も多い。今回は研究を支援するための取り組みとして、論文作成支援サービスの事例を報告していただく。研究発信を支援する3つの取り組みから日本の現状を再確認したい。

II. 話題提供

3 名の話題提供者から以下の講演があった。講演要旨は下記のとおり。

1. 「韓国医学図書館の研究支援サービスの現況」

李 英震 韓国医学図書館協議会企画委員(江東慶熙大学校病院 医学図書室)

個人や機関の競争力を評価する際に研究者や機関の研究成果を対象として取り扱う傾向が高くなっているため、研究活性化に対する要望がますます増加している。しかし、大学や総合病院では診療に関わる時間が多いため、研究者は研究のための時間確保に苦慮しているのが現状である。

韓国の医学図書館は、これまで病院の中心的任務である診療、研究、教育のうち、教育と診療に重点をおいて活動してきたが、近年、研究活動の重要性が顕著になっていることから、研究への関心が高まっている。

”医学“という専門分野を対象とする医学図書館は、困難に直面している研究活動を支援し、司書の専門性を高めることで業務領域の拡大をはかり、多様な研究支援サービスを開発して適用している。そうした近年のサービスの中から、研究課題選定、研究論文作成支援、研究業績管理の三つの紹介があった。

1) 研究課題選定：研究者の関心テーマの全般的な動向を把握するとともに最新研究成果の収集を行う。そのために調査過程で多くの情報を効果的に収集しなければならないことから、司書の力量を必要とするサービスである。

(1) 情報調査および相談サービス

(2) HistCite を利用した PRP(Personal Research Profile) サービス

(3) 利用者教育：利用案内教育、情報検索教育、所蔵資料検索システム教育、書誌管理ツール活用法(EndNote, RefWorks など)

2) 研究論文作成支援：学会や出版社への投稿支援という実質的サービスで、司書の専門的な業務能力が要求される。

(1) 論文形式修正

(2) イメージ (Figure) 製作

(3) オンライン投稿 (Online Submission) 支援

(4) サービスの継続的なアップデート

3) 研究業績管理：研究業績管理システムや SCI、SCOPUS など引用文献 DB などを通して機関および個人の研究業績を管理して所属機関の各種研究動向把握及び成果分析に活用する。

(1) 研究実績分析

(2) 個人研究業績管理

以上のとおり、韓国医学図書館“研究支援サービス”に関して報告があった。研究者の多様で包括的な研究支援要求を満足させるため、医学図書館の素早いサービスが開発されなければならない、これによって司書の力量も高めることが望まれる。

2. 「国立系医科大学における学術機関リポジトリの取り組みについて」

加藤 晃一 京都大学附属図書館、元浜松医科大学学術情報課長

国立情報学研究所（NII）の「機関リポジトリ一覧」によれば、日本国内では 167 の学術機関リポジトリが公開されており（本年 4 月 17 日現在）、平成 23 年度の統計では、157 の機関リポジトリにより約 130 万件のコンテンツが公開・提供されている。NII の学術機関リポジトリ構築連携支援事業（CSI）や共用リポジトリサービス「JAIR0 Cloud」の提供もあり、機関リポジトリを公開する大学・研究機関は増加を続けており、日本医学図書館加盟館によるものも多数公開されている。千葉大学による「千葉大学学術成果リポジトリ

（CURATOR）」登場（2005 年正式運用開始）以降、大学における学術情報発信・研究成果公開を担うものとして、学術機関リポジトリが注目・重用されているが、その基盤となるコンテンツ収集やシステム運用の中心となっているのが図書館員である。

今年 3 月まで勤務の浜松医科大学附属図書館における事例を中心に、「デジタルリポジトリ連合（DRF）」など、学術機関リポジトリを取り巻くコミュニティの活動の紹介があり、学術情報発信について考える場となった。

3. 「国内学術雑誌の電子化および発信の現状と課題」～J-STAGE とジャパンリンクセンターを中心に～

久保田 壮一 独立行政法人 科学技術振興機構

平成 22 年度末に国内学協会誌の電子化状況について調査した結果、国内学協会誌の電子化率は全体で 62%であったが、人文社会系は 34%と依然遅れている。また、言語別で見ると欧文誌 92%に対して和文誌は 55%という結果になり、さらなる電子化の推進が必要な状況にあることが判明した。

このような状況を踏まえ、JST ではユーザビリティの向上、国際発信力のさらなる強化を目的として、新電子ジャーナルサイト「J-STAGE3」を開発し、①過去分の公開サイトである Journal@rchive の統合、②デザイン／ユーザインタフェースの一新、③論文データ形式の国際標準である JATS (Journal Article Tag Suite) XML の採用、④購読・販売管理機能の強化、⑤学協会運用工数の削減、及び⑥投稿審査システムの改善を実現した。

また、日本の情報サービスの機能向上と日本の研究成果や学術情報の発信力強化を目的としてジャパンリンクセンター（JaLC）を開発した。JaLC は国内外の学術コンテンツとのリンクや引用・被引用情報を提供する。また、国内の各機関が保有する電子的学術コンテンツ（雑誌論文、書籍、学位論文等）の書誌・所在情報を一元的に整備・管理し、国際的な識別子であるデジタルオブジェクト識別子（DOI）の付与機能も備える。

JaLC の運営は JST 単独ではなく、日本の中心的情報機関が共同で行う予定である。

今年三月に JaLC は世界で 9 つ目の DOI 登録機関（Registration Agency）になることが承認された。現在の JaLC は CrossRef DOI しか取り扱えないが、今後、機能拡張を行い、JaLC 独自の DOI 登録が行える機能を実装する予定である。また、国内での利用を促進し、コンテンツの拡充、機能向上を検討している。

Ⅲ.質疑応答

1. 江東慶熙大学校病院 李英震氏に対する意見・質問

- ・ コアオーサーの1人となる位の多大な貢献をされていると感じる。素晴らしい。
- ・ 病院の体制で、診療と教育の割合はどういったものか。
→6：4程度である。
韓国の病院にとっての資金源だが、診療からの売上げが既に飽和状態となっているため、より研究活動を活発化させ、外部へ発表することでより多くのファンドを得ることがメインとなっているといった背景がある。そのため、医学図書館が積極的な研究支援を行うようになった。
- ・ 人材不足ということであったが教授何名に図書館員1人というサポート体制か。
→人手不足についてはあと5、6人くらいいけば仕事が回ると思う。
- ・ ベースとなる司書知識を得るための教育体制は。
→日々関係論文等を読む等の努力をしつつ、勉強会等の機会があれば参加する。
- ・ 図書館の研究活動はどういったものを行っているか。
→日々の勉強、活動をまとめ、論文として投稿する機会があれば、投稿を行う。

2. 京都大学附属図書館（元浜松医科大学） 加藤晃一氏に対する質問

- ・ リポジトリ全体では、キラーコンテンツはどういったものになるのか。
→アクセス数が多いものは北大の「らきすた（アニメ）」を扱ったものなどがある。
- ・ 今後リポジトリの取り組みを行う人に対するアドバイスはあるか。
→C S I 事業を熟知する、D R Fのメーリングリストに登録するなど

3. J S T 久保田氏に対する質問

- ・ 時間内には特になし

終了後、闊達に質疑応答、名刺交換が行われていた。

以上

文責：火口正芳（独立行政法人 科学技術振興機構 情報提供部）